

# 対人不安とアタッチメントスタイルとの関連についての検討<sup>1)</sup>

## An Examination of Relationships between Social Anxiety and Attachment Styles

西 村 洋 一\*

### Abstract

This research examined the relationship between attachment style and social anxiety (and social passivity). Trait relationship awareness and rejection cognition were also dealt with as mediator variables, and built into the analysis models. 205 university students completed the questionnaires. Results showed that there were moderate correlations between “anxiety” in attachment dimensions and social anxiety – social anxiousness and anxious experiences in relation to those regarded as important and to those regarded as less intimate. The results of pass analyses demonstrated that the association between “anxiety” in attachment dimensions and social anxiety was mediated by two variables (relationship awareness and rejection cognition). That is to say, “anxiety” in attachment dimensions influenced those mediator variables positively, and then social anxiety was heightened by those two mediator variables. When anxious experiences in relationships with others were the objective variables, a direct pass from “anxiety” in attachment dimensions to those variables remained significant. These findings revealed that only “anxiety” in attachment dimensions was influential in social anxiety, and the association was stronger when the relationships with others were specified.

キーワード：対人不安／アタッチメントスタイル／拒絶の認知

### 問 題

他者とコミュニケーションを行う際に、我々は緊張したり、落ち着かない気持ちを経験することがある。このような感情は心理学において「対人不安」として捉えられている。対人不安の定義は多様にあるが、本研究では「現実のあるいは想像上の対人場面において他者からの評価に直面したり、それを予測することから生じる不安」という定義を採用する (Schlenker & Leary, 1982)。このような感情は多くの人を経験するものであるが、頻繁に強度の不安を感じることはになると日常生活に困難をきたすこともあり、その感情の性質について、あるいはそのような不安を経験しやすい特性（以下、対人不安傾向と呼ぶ）についての理解

が求められている。

対人不安についてはこれまでに多くの研究がなされているが、本研究では、関係性という概念から検討を行う。特に近年研究の発展が目覚ましいアタッチメント理論を取り上げ対人不安傾向、および特定の関係における不安経験の説明を試みる。アタッチメント理論は Bowlby (1969, 1973) によって提唱されたものであり、その中でアタッチメントは乳幼児が養育者との関係の中で自己が生存する可能性を高めるためのシステムとして捉えられている。Bowlby においてもこのようなアタッチメントシステムは乳幼児期に限らず人生全体に関わるものとされていたが、Hazan & Shaver (1987) はアタッチメント理論を成人の恋愛関係へより明確に適用し、それ以降成人アタッチメント研究は飛躍的に増大した。そのような流れの中で対人不安という感情についてもアタッチメント

\* Youichi NISHIMURA  
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科  
人間関係論、社会心理学

理論から理解することの重要性が指摘されている (Vertue, 2003)。Vertue はアタッチメント理論がこれまでの対人不安についてのどの理論よりも包括的な理解をもたらすことをレビューにより示しているが、実証的にアタッチメントと対人不安の関連を調べた研究はほとんど見当たらない。数少ない研究の1つとして、社会不安障害の患者とアタッチメントの個人差であるアタッチメントスタイルとの関連を検討した研究においては、不安定な (論文では *anxious* と表現されている) アタッチメントスタイルの人は、安定型のスタイルの人に比べ、より激しい対人不安と対人的な回避を示したという知見がある (Eng, Heimberg, Hart, Schneier, & Liebowitz, 2001)。Vertue (2003) の指摘を鑑みると、アタッチメントと対人不安の関連をより多くの側面から検討し、実証的な知見を提供する必要があるだろう。そこで本研究では、アタッチメントと対人不安の関連を検討することを目的とする。対人不安の指標としては、対人不安傾向という特性レベルと重要な他者、半知りの他者 (心理的距離が中距離程度である他者、すなわちそれほど親密でない他者) との関係における不安経験を取り上げた。重要な他者との関係における感情の生起については、アタッチメントという概念の性質からすると、アタッチメントスタイルとの間に特に強く関連が出ると予測される。半知りの他者との関係を取り上げる理由は、対人不安 (およびその下位概念とも捉えられる羞恥心) が半知りの状態にある他者との関係において最も強く喚起されるという知見があることから (佐々木・菅原・丹野, 2005; 堤, 1992; 山際・堀, 1991)、検討を行うこととした。このように特性レベルおよび関係に特有の対人不安という複数の側面から対人不安とアタッチメントの関連を検討することで、より詳細な理解を求める。

### 対人不安とアタッチメント次元の関連

アタッチメントにおける個人差は前述のようにアタッチメントスタイル (あるいはアタッチメントパターン) と呼ばれ、研究が行われている。アタッチメントスタイルの捉え方は複数存在しているが、その内の一つである次元モデルとして「関係不安 (Anxiety)」の次元と「親密性

回避 (Avoidance)」の次元の2つの次元が理論的な観点や因子分析の結果から抽出されている (Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。そして、特に成人アタッチメント研究においては、現在この観点より行われる研究が主流とされている。

関係不安次元は Bartholomew (1990)、Bartholomew & Horowitz (1991) の言うところのアタッチメントにおける自己モデルと対応し、親密性回避は他者モデルと対応すると考えられている。自己モデルは、個人が自分自身の自己価値の感覚を内在化した程度を示していると考えられているが、この感覚は他者が自分へポジティブに反応する期待へとつながる。関係不安次元が高いということは自己モデルがネガティブであることとほぼ同義であると捉えられており、このネガティブな自己モデルは不安や他者からの承認への依存性の程度と結びつくと考えられている。また、金政・大坊 (2003)、金政 (2007) において異性関係および同性の友人関係における自己に対する認知を尋ねた結果、関係不安はそれぞれの関係における「自信」と負の相関を示した。このような不安や他者への依存性、親密な関係における自信のなさといった要素は、一般的な対人場面での不安である対人不安傾向とも関連が示されるであろう。そして、関係する他者を特定した上での不安経験との関連については、金政・大坊 (2003)、金政 (2007) の結果より、対人不安傾向よりも明確に示されることが予測される。

アタッチメントの他者モデルにおけるポジティブさの程度は、重要な他者が利用可能で支持的であるという感覚を内在化した程度を示している (Griffin & Bartholomew, 1994a)。そのため、他者モデルがネガティブな場合は、関係における密接感や関係からの回避と結びつくことになる。この他者モデルと対応する親密性回避の次元は、対人不安との関連が明確でないと思われる。親密性回避次元の高い人はアタッチメントへの脅威に関する思考を抑制し (Fraley & Shaver, 1997)、自伝的記憶における情動の強度が弱い (Mikulincer & Orbach, 1995) というように、対人不安を喚起するような状況においてもその認知や感情を抑制する傾向が強いため、ほとんど関連が見られないことが予測される。

### 対人消極傾向とアタッチメント次元との関連

本研究では対人不安傾向を測定する際に菅原(1998)によるシャイネス尺度を採用した。シャイネスは対人不安と混同しやすい、ある意味類似した概念である。シャイネスの定義は多くの研究者によりなされているが、必ずしも明確に区別がなされていないこともあり、全体として「対人不安」の研究の枠組みの中で捉えられていることが多い。ただし、シャイネスは対人不安という感情的側面と他者との関わりにおける行動抑制といった行動的側面の合わさった概念としての理解が一般的であると思われる。そのため、シャイネスを測定する際にはこの二つの概念を含んだ一次元上の尺度で測定されることが多いが、菅原(1998)によって作成された尺度はこの二つの側面を独立したものとして測定できるよう構成されている。そこで、この尺度を用いてアタッチメントスタイルとの関連を検討することにより、シャイネスの二つの側面の違いがよりよく理解されるであろう。親密性回避の次元は対人不安傾向との間に関連は予測されないが、対人消極傾向という行動抑制とつながる側面との間には関連が予測される。この点が両者の違いとして考えられる。なぜならば、前述のように、親密性回避次元の高い人はアタッチメント関連の脅威事態に対する反応としての思考や感情を抑制する傾向があるわけだが、そのような認知や感情の反応のスタイルは、アタッチメントスタイルに特有の行動を起こさせる可能性がある(Collins, 1996)。そして、Fraley & Shaver (1998)の研究では実際の行動を用いてこの点について検討を行っている。彼らは空港において、まさに別れようとしているカップルとそうでないカップルの行動について自然観察を行った。その結果、女性については、親密性回避の次元の高さと、カップルの相手との近接性を維持する行動との間に有意の負の相関が見られ、重要他者への接触維持行動が抑制されていることが、お互いの関係にとって特に脅威となる「別れ」を向かえるカップルにおいて多く見られた。このようなアタッチメント行動を抑制する傾向は、それが一般化することで、他者一般との関わりにおける消極性へ影響を及ぼすことが予測される。

### 本研究におけるアタッチメント次元から対人不安へとつながるモデル

本研究においては、アタッチメントスタイルと対人不安との関連を検討することとともに、関係性認知の概念をアタッチメントスタイルから対人不安へとつながるモデルの中に含め、その有効性を検討する。まず、その一つ目として関係性注目傾向を取り上げる。この変数は西村(2005)において検討されたような他者との関係性をどのように捉えるかという概念と関わるもので、特に他者との関係性へのあり様に向けた持続した注意、埋没と捉えられるものである。この変数はアタッチメントスタイルと対人不安の関連においてどのように位置づけられるだろうか。

Mikulincer & Shaver (2003)によれば、アタッチメントシステムが活性化した際(例えば危険を察知するなど)、まずはアタッチメント対象への近接性を求めることになる。しかし、そのような対象が利用可能でない(unavailable)場合に、その状況に対処するための2次的な方略をとることを決断することになる。2次的な方略には過活性化戦略(hyperactivation strategy)と非活性化方略(deactivation strategy)の2つがある。過活性化方略はアタッチメント対象からより多くの注意を払ってもらったり、保護やサポートを提供してもらうための方略であるが、当人に迫った身体的、心理的脅威を誇張したり、苦痛経験をより大きなものとしたりすることで達成しようとする。そして、アタッチメント対象の利用可能であるかどうかについてのサインに警戒を強め、心配や自分の脆弱さを反すうしたりする。このような方略はアタッチメントスタイルとの関係について次元モデルで考えてみると、関係不安の次元と特に関連するとされている。例えば、アタッチメント対象への過度の再確認傾向<sup>2)</sup>は、関係不安次元とはかなり高い相関を示すが、親密性回避次元とは相関が見られなかった(Shaver, Schachner, & Mikulincer, 2005)。このようにアタッチメント対象との関係性への過敏さは、それがある程度般化することにより他者との関係性への過敏さ(すなわち、関係性注目傾向)へとつながることが考えられる。そのため、アタッチメントスタイルの関係不安次元は、特に関係性注目傾向と関連を示すことが予測



される。そしてそのような過度の関係性への注目、埋没といった要因が多くの人対人場面での不安である人対人不安傾向へとつながると予測されるわけである。

アタッチメントスタイルから人対人不安への影響プロセスのもう一つの媒介変数として拒絶認知を挙げる。アタッチメントスタイルの関係不安次元と関連が深いと考えられる「不安—アンビバレント型」<sup>4)</sup>のスタイルの人は、アタッチメント関係における信頼という領域についてネガティブな期待を持っている (Baldwin, Fehr, Keedian, Seidel, & Thomson, 1993)。関係不安次元の高い人は、重要な他者との不安定な関係の繰り返しの経験により、不安定な内的ワーキングモデルが形成されるわけであるが、そのような人は他者との関係性においてネガティブな期待を持つことで、結果として拒絶を認知しやすくなると考えられる。人対人不安は他者との拒絶に代表される関係における切り下げ (devaluation) への警告として生じるものと考えられており (Leary & Buckley, 2000)、拒絶認知は人対人不安の生起についてアタッチメントからの影響を媒介する変数として機能することが予測されるのである。

上記の予測では、2つの関係性認知の要因がアタッチメントスタイルから人対人不安への影響プロセスを媒介すると考えられるわけであるが、それらの関係性認知の要因は、アタッチメントスタイルの関係不安次元と特に関連が見られることが予測される。親密性回避次元については、この次元の高い人がアタッチメントシステムを抑制する傾向にあることから (Baldwin & Key, 2003; Fraley & Shaver, 1997)、本研究で取り上げた2つの関係性認知の変数とは明確な関連が見られないであろう。

### 予備調査

予備調査では本調査で使用する尺度として、他者との関係性に注意を向ける程度の個人差を測定するための尺度の作成を行う。関係性注目傾向は「自分が形成している人間関係一般に注意、意識を向ける傾向」として定義し、尺度を構成する。そして、予備調査において作成された尺度の因子構造を確認するとともに、妥当性について、他の既存の尺度との関連から検討を行う。

## 方 法

**調査対象** 大学生男女 302 名 (男性 149 名、女性 151 名、無回答 2 名) であった。

**項目の収集** 関係への意識を測定する尺度を作成するために、本尺度の定義から関連すると考えられる尺度として、自己没入尺度 (坂本, 1997)、他者意識尺度 (辻, 1993)、The relational awareness scale (Snell, 2002)、relationship thinking scale (Cate, Koval, Lloyd & Wilson, 1995) を参考に、予備調査として自由記述で収集した項目とあわせて 27 項目を選定し、尺度を作成した。

### 使用尺度

**関係性注目傾向尺度** 項目の収集により作成された全 27 項目の尺度である。「全くあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」の 5 件法で回答を求めた。

関係性注目傾向尺度の妥当性を見るために以下の尺度について同時に回答を求めた。

**自意識尺度** 自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差を測定するものであり、菅原 (1984) により作成された尺度である。21 項目について、「全くあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (7)」の 7 件法で回答を求めた。本尺度は、「公的自意識」と「私的自意識」の 2 つの下位尺度から構成されており、下位尺度ごとに得点を算出した。

**対人的志向性尺度** 斎藤・中村 (1987) により作成された尺度である。18 項目について「全くそう思わない (1)」から「非常にそう思う (5)」の 5 件法で回答を求めた。本尺度は「人間関係志向性」、「＝対人的関心」、「個人主義志向性」の 3 因子から構成されている。

**友人関係満足感尺度** 加藤 (2001) により作成された尺度である。6 項目について「全くあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」の 5 件法で回答を求めた。

**セルフ・モニタリング尺度** Snyder (1974) により作成された尺度を岩淵・田中・中里 (1982) が翻訳した尺度である。自分のおかれた社会的状況の性質を察知し自己の表出行動や自己呈示を統制するプロセスの個人差を捉えるものである。25 項目について「全くそう思わない (1)」から「非

常にそう思う (5)」の 5 件法で回答を求めた。本尺度は「外向性」、「他者志向性」、「演技性」の 3 因子からなり、下位尺度ごとに得点を算出することが可能である。

日本版 MLAM 承認欲求尺度 Martin (1984) によって作成された承認欲求尺度を、植田・吉森 (1991) が翻訳したものである。20 項目について「全くあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」の 5 件法で回答を求めた。本尺度は「外的統制」、「社会的スキル」、「冷めた人間関係」、「慎重さ」、「対人的防衛」の 5 因子から構成されている。

る。

## 結 果

### 項目の信頼性、因子分析、尺度の信頼性について

項目分析 項目の分布の検討、および I-T 相関分析を行った結果、27 項目すべてが、有効な項目として採用された。

因子分析 関係性注目傾向尺度の因子構造を検討するために因子分析を行った。最尤法により因子を抽出し、固有値 1 以上の因子を採用し、因子数を 3 に定め、プロマックス回転を行った。さらに、

Table 1 関係性注目傾向尺度の因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	$h^2$
03 お互いの信頼関係について気にすることが多い。	<b>.83</b>	.01	-.05	.66
01 自分と他者との関係について、この先どのようになるかということについてよく考える。	<b>.82</b>	-.04	-.09	.58
02 自分と他者の関係の良好さについて考え出すと、なかなかそれをやめることができない。	<b>.79</b>	.01	.05	.68
07 自分が関わる人間関係がどのようなものであるのか、長い間考え続けることがよくある。	<b>.48</b>	.39	-.03	.61
18 自分が理想とする人間関係と実際に形成している人間関係を比較することがよくある。	<b>.45</b>	.05	.18	.34
17 自分が相手に感じているのと同じように関係している他者が感じているかどうか気になる。	<b>.42</b>	.00	.28	.34
05 私は他者との関係性が悪いことを示す手がかりに敏感である。	-.03	<b>.71</b>	-.04	.45
23 私は自分の周りの人間関係の状態に生じる変化に警戒している。	.05	<b>.58</b>	.19	.54
15 ふだんから、私は自分の人間関係の性質に注意を向けている。	.17	<b>.57</b>	.06	.53
21 私は自分の関わる人間関係において進行していることをとても意識しながら行動する。	.16	<b>.55</b>	.11	.53
08 私はいつも自分が形成している人間関係がどのようなものであるか理解しようとしている。	.33	<b>.54</b>	-.17	.53
25 私は他者が自分にどのくらい親密感を感じているかについて敏感に感じ取る方だ。	-.02	<b>.50</b>	.18	.37
06 自分と他者との関係における変化にはあまり敏感ではない。	.06	<b>.52</b>	.05	.21
27 相手が誰であっても、その人との関係がどのようなものであるか、心配になることがある。	.16	-.01	<b>.72</b>	.63
24 自分にとって大事な相手ではないと思っていても、その人との関係が悪くなると気になってしまう。	-.02	.06	<b>.67</b>	.49
16 合わないと思った人との関係については考えない。	.09	.04	<b>.61</b>	.31
因子間相関	Factor1	—	.67	.41
	Factor2		—	.51
	Factor3			—

※Factor1=「関係性へのとらわれ」、Factor2=「関係性への敏感さ」、Factor3=「関係性への懸念」

適合度の観点より検討を行うために因子数を3に固定した上で、ステップワイズ法による変数選択を用いた探索的因子分析<sup>5)</sup>を行った。その結果をふまえ、最終的に16項目の分析結果を適合度指標 ( $\chi^2_{(75)} = 72.9, p = .55, GFI = .95, AGFI = .91$ )、および解釈可能性の観点から採用した。結果はTable1に示してある。

第1因子は、他者との関係性について考え続ける傾向を示す項目が多く寄与していることから「関係性へのとらわれ」と命名した。第2因子については、他者との関係性の変化への敏感さを示す項目が多く寄与していることから「関係性への敏感さ」因子と解釈した。第3因子は、他者との関係が悪い方向へ変化することへの懸念を示す項目が寄与しており「関係性への懸念」因子と解釈した。3つの因子の因子間には中程度の相関があり、下位因子間には関連があることを示している。

**信頼性** 尺度の内的一貫性を確かめるため、尺度全体及び下位因子ごとにクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、尺度全体が $\alpha = .88$ 、第1因子が $\alpha = .85$ 、第2因子が $\alpha = .72$ 、第3因子が $\alpha = .71$ となり、十分な値が得られた。

63名の学生に対して、約3ヶ月後に再調査を行い、再検査信頼性を算出した。第1因子は $r = .68$ 、第2因子は $r = .63$ 、第3因子は $r = .41$ であり、尺度全体では、 $r = .68$ であった。

**妥当性の検討** 尺度の妥当性を検討するために、関係性注目傾向尺度の合計得点、および下位因子ごとの合計得点を算出し、他の指標との相関係数を算出した。結果はTable2のようになった。自己意識尺度、対人志向性尺度、承認欲求尺度の下位尺度と関係意識尺度との間に有意な相関が多く見られるが、全て予測された方向に関連を示した。またセルフ・モニタリング尺度の下位尺度と

Table 2 関係意識尺度と他の指標との相関係数

( <i>n</i> =302)	関係性への とらわれ	関係性への敏感さ	関係性への懸念	関係性注目傾向 尺度合計
PuSC	.52**	.48**	.52**	.46**
PrSC	.36**	.51**	.16**	.38**
PO	.27**	.31**	.31**	.30**
IC	.54**	.54**	.49**	.50**
IO	.34**	.34**	.40**	.34**
FS	.02	.11†	.01	.10†
<hr/> ( <i>n</i> =114)				
Ex-SM	-.12	.01	-.21*	-.09
Oc-SM	.18†	.19*	.09	.15
A-SM	.10	.10	-.10	.03
S-SM	.06	.12	-.08	.04
<hr/> ( <i>n</i> =118)				
MLAM-S	.38**	.38**	.29**	.32**
MLAM-E	.40**	.37**	.35**	.29**
MLAM-S	.27**	.31**	.28**	.41**
MLAM-C	.20*	.21*	.08	.15
MLAM-D	.09	.13	-.01	.06
MLAM-I	.17†	.13	.13	.11

※PuSC=公的自己意識, PrSC=私的自己意識, PO=人間関係志向性 (対人志向性), IC=対人的関心 (対人志向性), IO=個人主義志向性 (対人志向性), FS=友人関係満足感, Ex-SM=セルフ・モニタリング・外向性, Oc-SM=SM・他者志向, A-SM=SM・演技性, S-SM=SM・合計, MLAM-S=承認欲求尺度全体, MLAM-E=外的統制, MLAM-S=社会的スキル, MLAM-C=冷めた人, MLAM-D=慎重さ, MLAM-I=対人防衛 \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

の間にはあまり関連が見られなかったが、相関が予測された他者志向とは、「関係性のとらわれ」因子、「関係への敏感さ」因子との間には、低いながらも相関が見られた。

## 考 察

予備調査では、他者との関係性に注意を向ける程度の個人差を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性についての検討を行った。因子分析を行った結果、「関係性へのとらわれ」、「関係性への敏感さ」、「関係性への懸念」の3因子が抽出された。関係性へのとらわれ因子は、自己と他者との関係性がどのようにになっているかに持続性を持って注目する傾向を示していると考えられる。「関係性への敏感さ」因子は、他者との関わりの中での関係性の変化に注意を向け、その変化を敏感に感じ取る傾向である。最後に3番目として「関係性への懸念」因子が得られた。これは当初想定していなかった因子である。関係性への注目は、他者との関係性がネガティブな方向に変化した際に、それをすばやく察知することが個人にとって特に有益であろう。そのように考えると、関係性への注目のネガティブな変化への敏感さを強くあらわす因子が得られたと考えられる。

このように、因子分析の結果3つの因子が得られたわけであるが、因子間相関を見ると中程度から強めの相関が得られた。関係性への注意の持続や関係性の変化への感受性といった要素を別個にして個人差を考えるよりは、全ての要素を合わせて「自己と他者との関係性への注目」における個人差として捉えた方が、概念的にもより上手くその個人差を測定できると考えられる。そのため、3つの因子を総合したものを個人の関係注目傾向の強さとして捉えることが可能であろう。

因子分析の結果えられた下位因子、及び尺度全体の合計得点についてその信頼性、妥当性の検討を行ったが、信頼性については $\alpha$ 係数、再検査信頼性ともに十分な値が得られたと思われる。妥当性の検討については、概ね予測された方向に他の尺度との関連が見られた。特に、自意識尺度、対人志向性尺度および承認欲求尺度との間には、中程度の相関が得られた。関係性というものが自己と他者というものを含むものであると考えると、

これらの尺度との間に中程度の相関が得られたことは、関係性についての概念をうまく捉えられていることが示されていると考えられる。

予備調査の結果から尺度の構成および信頼性・妥当性の検討によりある程度の信頼性と妥当性を持ち合わせた尺度が作成されたと思われる。より多くのサンプルを用いたり、特定の他者との関係に焦点を当てた検討などを行っていく必要があるが、本調査では関係性への注目傾向の個人差を測定する尺度として、本尺度を使用する。

## 本 調 査

### 方 法

**調査対象者** 4年制大学の大学生男女 205 名を対象とした。男性が 125 名、女性が 66 名、無回答が 14 名であった。平均年齢は 21.6 歳 ( $SD = 4.3$ ) であった。

### 調査内容

**アタッチメントスタイル** アタッチメントスタイルの測定には、Griffin & Bartholomew (1994b) の尺度を中尾・加藤 (2003) が翻訳した「多項目式関係尺度 (以下、RSQ) を用いた。この尺度により、アタッチメントスタイルの2次元 (関係不安、親密性回避) の測定を行った。24 項目を7段階尺度で回答させた。

**関係性注目傾向尺度** 予備調査において作成された自己と他者との関係性の状態に注意を向ける傾向の個人差を測定するために尺度である。16 項目を5段階尺度で回答させた。

**シャイネス尺度** 菅原 (1998) により作成された尺度である。17 項目を5段階の尺度で回答させた。対人不安傾向を測定する尺度 (9 項目) と対人消極傾向を測定する尺度 (8 項目) の2つの下位尺度を含んでおり、両者は異なる特性として構成されると解釈されている。この尺度により、対人場面において不安を感じる傾向としての対人不安傾向と対人場面における行動的な消極性を分けて測定することが可能である。

**特定の関係における不安経験の程度** まず調査対象者自身にとっての重要な他者、半知りの他者を一人挙げてもらい、個々の関係において最近1ヶ月の間に経験された不安の程度をたずねた。清



水・今栄(1981)のState-Trait Anxiety Inventoryの状態不安尺度から、Marteau & Bekker(1992)のstate anxiety inventory short formを参考に、6つの項目を採用した。それぞれの項目をどのくらい感じているか(全く感じていなかった-とても感じていた)を回答してもらった。

**拒絶認知** Leary(2005)による拒絶認知の概念についての検討を参考にした。Leary(2005)によれば、自己との関係について他者に評価してほしいと望む水準(願望水準)が、他者が実際に評価しているだろうと思う水準(現実の水準)よりも下回っているときに他者との関係において拒絶を認知するとしている。そこで、本研究では願望水準と現実の水準をそれぞれ同じ質問項目で回答してもらい、願望水準から現実の水準の得点の差を求め、拒絶認知得点とした。質問項目については、関係性評価の基準として「重要性」、「価値」、「親密さ」の3点が挙げられているため(Leary, 2005)、3つの評価基準について同様の意味を持つように2項目ずつ作成した。その結果全6項目となった。この6項目について7段階尺度で回答を求めた。

## 結 果

### 尺度の検討

まず、項目の分布について検討を行った。その結果使用された尺度の全ての項目が採用された。

次に、本調査に用いられた関係性注目傾向尺度以外の尺度に対して因子分析(主因子法)を行った。シャイネス尺度については、固有値の推移から2因子が妥当と判断され、その2因子についてバリマックス回転を行った。その結果、先行研究と同様の因子構造が得られたが、対人消極傾向に含まれていた1項目の因子負荷量が低かったため、得点を算出する際にはずすことにした。そのため、対人不安傾向因子の9項目( $\alpha = .79$ )と、対人消極傾向因子の7項目( $\alpha = .83$ )の合計得点をそれぞれの尺度得点とした。

RSQについても同様に、因子分析(主因子法)を行ったところ、固有値の推移より2因子が妥当と判断された。2因子についてバリマックス回転を行ったところ、因子負荷量の低さ(.35以下)のために7項目が除去されたが、因子自体は先行

研究と同様の因子として解釈可能であった。そこで関係不安因子の12項目( $\alpha = .87$ )と親密性回避因子の5項目( $\alpha = .74$ )の合計得点をそれぞれの尺度得点とした。

特定の関係における不安の経験の程度をたずねた尺度に対する因子分析の結果は、どちらの関係においても「平静でいる」の項目以外逆転項目とらずにポジティブな感情の因子としてネガティブな感情因子と分かれた。本研究では、ネガティブな感情3項目と「平静でいる」1項目(逆転項目)を足した4項目を不安感情尺度として採用し分析に用いた(重要他者との関係: $\alpha = .71$ ; 半知りの関係: $\alpha = .80$ )。

拒絶認知については、他者との関係性についての願望の評価尺度、実際の評価尺度ともに1因子構造であることが確認されたため、それぞれの尺度の合計得点を算出し、その差を求め、拒絶認知得点とした。

次に、関係性注目傾向尺度に対して確証的因子分析を行った。まず、探索的因子分析を行ったところ予備調査の結果と概ね同様の3因子が得られた。その3つの因子の上位に一つの因子を仮定した2次因子モデルを検討した結果、 $GFI = .91$ 、 $AGFI = .88$ 、 $CFI = .94$ 、 $RMSEA = .06$ とほぼ満足のいく適合度指標が得られた。そこで関係性注目傾向という個人差の得点として16項目全体の合計得点を関係性注目傾向得点( $\alpha = .86$ )とした。

### 各測度間の関連

各測度の関連を見るために、相関係数を算出した。結果はTable3に示してある。アタッチメントの不安次元は、一般的な対人関係の中での不安傾向(対人不安傾向)や特定の他者との関係の中での不安指標との間に中程度から弱い相関が得られた。また、他者との関係性への敏感さと考えられる関係性注目傾向との間にも中程度の相関が得られた。さらに、普段の他者との関係における拒絶認知との間にも弱い相関が見られた。

アタッチメントの回避次元では、対人消極傾向との間に弱い相関が見られたが、不安指標との間には、重要他者との関係における不安との間のみ弱い相関が得られた。



Table 3 各測度間の相関係数と平均値および標準偏差

	1	2	3	4	5	6	7	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 関係不安	—							42.6	13.2
2 親密性回避	.29**	—						18.7	6.0
3 関係性注目傾向	.52**	.08	—					50.5	11.3
4 拒絶認知	.28**	-.01	.18**	—				10.8	6.4
5 対人不安傾向	.24**	.02	.37**	.19**	—			33.6	6.5
6 対人消極傾向	.19**	.21**	-.07	.18**	-.26**	—		21.0	6.2
7 重要他者関係不安	.35**	.12*	.27**	.08	-.01	.07	—	11.2	5.0
8 半知り関係不安	.32**	-.01	.37**	.17**	.34**	.11	.26**	13.8	5.2

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

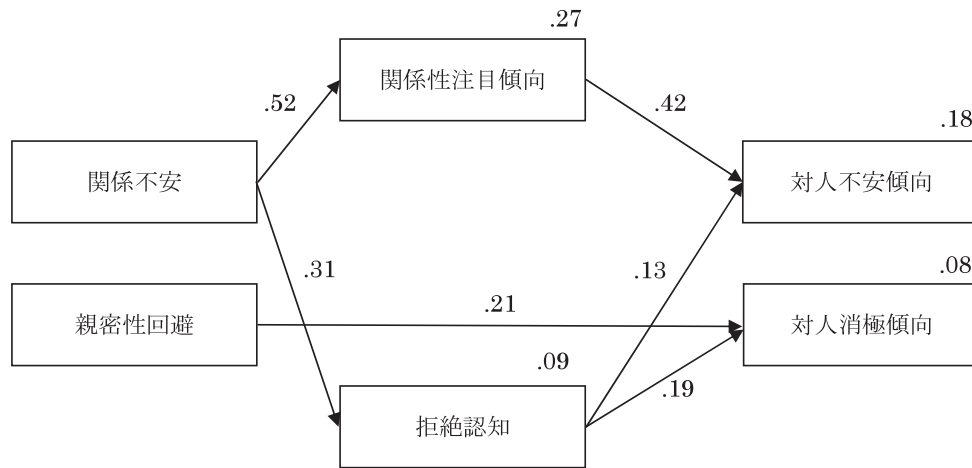


Figure 1 アタッチメントスタイルから対人不安傾向へとつながるモデル  
(有意なパスのみ表示 内生変数に示された数値は重決定係数)

### パス解析によるモデルの検討

アタッチメントの各次元と対人不安傾向、対人消極傾向の間の関連において、関係性注目傾向、および拒絶認知がそれらの変数間を媒介するモデルについてパス解析による検討を行った (Figure1)。アタッチメントスタイル、関係性注目傾向、拒絶認知、対人不安傾向、対人消極傾向の全ての変数を用いたモデルを採用したが、適合度指標は、 $GFI=.98$ 、 $AGFI=.93$ 、 $CFI=.97$ 、 $RMSEA=.08$  となり、適合したモデルであると判断された。

それぞれのパス係数を見ていくと、対人不安傾向については、アタッチメントの「不安」次元からの直接効果が有意ではなくなり ( $\beta = -.05$ )、

関係性注目傾向 ( $\beta = .42, p<.001$ )、拒絶認知 ( $\beta = .13, p=.51$ ) を媒介した影響のみが有意 (拒絶認知は有意傾向) であった。対人消極傾向については、アタッチメントの回避次元の直接効果が有意であり ( $\beta = .21, p<.001$ )、拒絶認知からの影響も有意であった ( $\beta = .19, p<.01$ )。

次に、特定の関係における不安を目的変数としたモデルについて同様に検討を行った (Figure2)。対人不安傾向の分析と同様に、全ての変数を投入して分析を行ったところ、適合度指標は、 $GFI=.99$ 、 $AGFI=.99$ 、 $CFI=.99$ 、 $RMSEA=.01$  となり、適合したモデルであると判断された。

それぞれのパス係数を見ていくと、アタッチメントの回避次元が重要他者との関係における不安

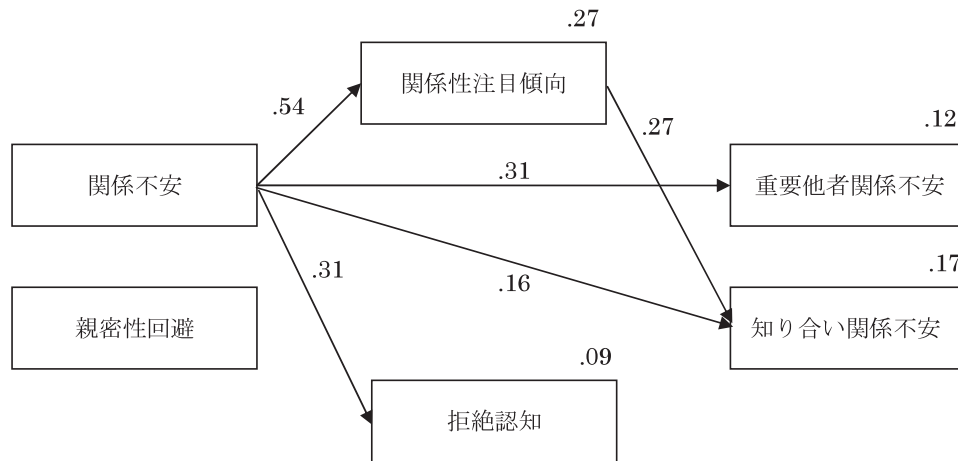


Figure 2 アタッチメントスタイルから関係に特有の不安経験へとつながるモデル  
(有意なパスのみ表示 内生変数に示された数値は重決定係数)

の程度については、関係性注目傾向、拒絶認知とも有意な効果を与えておらず、アタッチメントの不安次元の直接効果のみが有意であった ( $\beta = .31, p < .001$ )。半知りの他者との関係における不安の程度については、関係性注目傾向が媒介変数として有意な効果を示したが ( $\beta = .27, p < .001$ )、アタッチメントの不安次元からの直接効果も有意であった ( $\beta = .16, p < .05$ )。

## 考 察

### アタッチメントスタイルと対人不安

本研究において、アタッチメントと対人不安の関連について、相関係数およびパス解析によりその検討を行った。Vertue (2003) において、アタッチメント理論からの対人不安理解の重要性が指摘されているが、両者の関連という基礎的な知見がほとんど見られないため、両者の関連を検討することがまず重要な検討事項であった。

アタッチメントスタイルと対人不安傾向との関連について本調査の結果を見ると、予測通りアタッチメントスタイルの関係不安得点とのみ対人不安傾向との関連が見られた。重要他者との繰り返しの相互作用を心的表象として内在化した内的ワーキングモデルがアタッチメントスタイルの基礎となるわけであるが、関係不安得点が高い人は自己が他者との関係において価値ある存在であるということに対してネガティブな自己モデルを持っている。このような自己モデルが、重要な他者との関係からそれ以外の他者とのより一般的な関係

へ般化することで、多くの対人場面における不安喚起（すなわち対人不安傾向）につながると考えられる。実際、関係別の不安経験との関連を見ても重要な他者との間での不安経験だけでなく、知り合いとの関係における不安経験においても有意な関連が見られており、このような解釈を支持する一つの知見であると考えられる。

ただし、重要他者との関係における不安については概念的に見てかなりの関連の強さが考えられたが、相関係数自体は必ずしも高いものではなかった。これは内的ワーキングモデルの構造の複雑さによるものかもしれない。自己報告式のアタッチメントを測定する尺度は、主に包括的なアタッチメントスタイルを測定していることが仮定されているが、内的ワーキングモデル自体は、関係特有のモデルが存在するという見解もある。そして、全体の構造として、包括的なモデルの下に関係に特有のモデルが連なるという階層的な構造の存在についての理論的仮定 (Collins & Read, 1994) や知 見 (Overall, Fletcher, & Friesen, 2003; Pierce & Lydon, 2001) もある。アタッチメントのような概念は関係の多様性から複雑な構造となり、関係の種類により接近可能となるワーキングモデルに変化が見られる可能性があることから、対人不安との関連を考える際にも他者との関係性を考慮した上でより詳細に検討する必要があると思われる。

アタッチメントスタイルの親密性回避得点と感情的反応としての対人不安との関連については、予測通り関連が見られなかった。そして、他者と

の関わりに消極的である傾向としての対人消極傾向との間に有意な関連が見られた。金政・大坊(2003)の研究において、親密性回避得点が高いと、GHQにおける社会的活動障害、関係における自己認知の中の社交性がそれぞれ低くなることが示されており、本研究の結果と対応するものであると考えられる。

また、菅原(1998)は対人不安傾向と対人消極傾向を別次元でとらえているが、アタッチメントスタイルとの関連においても対人不安、対人消極のそれぞれの傾向がそれぞれのアタッチメントの得点とのみ関連しているという知見はとても興味深いと思われる。本研究では、アタッチメントスタイルから対人不安への影響を考える際に、重要な他者との関係の中で形成されたアタッチメントスタイルが、一般的な対人場面へ影響を与えるという仮定を行っている。そして本研究で得られた異なるアタッチメント次元が対人不安、対人消極性というそれぞれの特性へ別個の影響を与えるという知見は、対人不安傾向と対人消極傾向が別次元のものであるという提案に対してアタッチメント理論から説明できる可能性を示唆していると考えられる。

### 媒介変数について

本研究においては、アタッチメントスタイルから対人不安への影響を考える際に、両者の間に2つの関係性認知の変数を入れてモデルを構成した。関係性認知の変数として関係性注目傾向と拒絶認知の2つを挙げたが、これらの変数はアタッチメントスタイルから対人不安への影響について媒介変数として有効であることが示された。特に対人不安傾向との関連については、関係不安次元からの直接効果が2つの変数により有意でなくなっており、媒介変数としての有効性が示されている。

アタッチメントの関係不安次元の高さは、関係への脅威を示す手がかりへの過度の警戒につながるという知見から、関係性注目傾向との間に強い関連が予測された。本研究の結果は、アタッチメントの関係不安次元から関係性注目傾向へのかなり強い正の影響を示しており、アタッチメントの関係不安次元が高いと関係性注目傾向が高いとい

う予測を支持する結果であった。また、拒絶認知についても因果係数が中程度の値となっており、予測通りアタッチメントの関係不安次元が高いことで、他者との関係性における拒絶を認知しやすいという結果が得られた。

これらの媒介変数から対人不安への影響についても概ね予測通りの結果であった。関係性注目傾向、拒絶認知ともに対人不安傾向に対して正の影響が見られており、特に関係性注目傾向から対人不安傾向への影響は強いものであった。他者との関係性の变化について敏感になり、その関係に注意が埋没する傾向が、多くの対人場面において不安を喚起する傾向を高めることが示されたと考えられる。

関係性注目傾向に対して、拒絶認知はわずかに有意となっておらず、両者の影響のプロセスは明確ではなかった。本研究においては、拒絶認知の測定を、Leary(2005)の対人的な拒絶についての概念化を基に行ったが、測定の方法としてやや探索的な部分があったのは否めない。他者が自己との関係に対してどのくらい重要と認知しているかということについての願望水準と現実の水準の差により定義を行ったことから、拒絶認知の測定においても差の得点を用いたが、このような測定方法の妥当性について再検討が必要であろう。その上で拒絶認知と対人不安との関連について検討をすることが今後の課題となる。

関係に特有の不安経験を目的変数とした分析については、関係性注目傾向、拒絶認知の媒介変数としての有効性が一部にのみ示された。関係性注目傾向は知り合いとの関係における不安経験にのみ有意な影響が見られ、拒絶認知はどちらの変数にも有意な影響が示されなかった。拒絶認知については、まず前述のような測定の妥当性の問題がここでも適用されるだろう。関係性注目傾向については、単相関のレベルでは、重要他者、知り合いとの関係における不安経験のどちらとも有意な関連が示された。しかし、パス解析においては、重要他者との不安経験において、アタッチメントの関係不安次元の直接効果のみが有意となり、それにより関係性注目傾向からの効果は有意でなくなった。この結果から、重要他者との関係における不安については、アタッチメントの関係不安次



元における関係性への注目という認知操作以外の影響が強いということが考えられる。金政・大坊(2003)の結果にあるように、関係不安次元が高い人は関係の中での「自信」と負の相関があることが示されている。そのようなネガティブな自己認知自体が直接不安喚起に影響を与えているのかもしれない。

知り合いとの関係における不安経験については、アタッチメントの関係不安次元から関係性注目傾向を介した間接効果も有意だったものの、アタッチメントの関係不安次元からの直接効果も有効であった。これについてもネガティブな自己モデルというものの自体の影響の強さが示されたとも考えられる。ただし、関係性注目傾向、拒絶認知ともに、一般的な他者との関係における傾向、および認知をたずねている。内的ワーキングモデルについての議論に通じることであるが、これらの媒介変数についても包括的なものだけでなく、関係に特有のものが存在する可能性がある。関係に特有の不安への影響を検討する際には、このようなそれぞれの関係に特有の関係性認知のあり様のほうが、説明変数としてより有効であるかもしれない。この点については、今後の課題になると思われる。

これまで述べてきたように、本研究により対人不安とアタッチメントスタイルの関連性、およびそのプロセスモデルの一端が示されたが、課題も複数残っている。今後は両者の関連についてより一層の理論の精緻化、そしてそれに基づいた多くの実証的検討が必要であろう。

#### <注>

- 1 本論文の一部は日本心理学会第69回大会において発表された。
- 2 再確認傾向は「自分は愛されているのか、自分は価値がある存在なのかについて、すでに確認をしたかどうかにかかわらず、重要他者に対して過度に、しつこく確認を求めてしまう比較的安定した傾向」と定義されている(勝谷, 2004)
- 3 アタッチメントスタイルの3類型モデルにおける一つのカテゴリー名である。
- 4 この分析には、オンラインソフトであるSEFA(Stepwise Variable Selection in Exploratory Factor Analysis)を使用

した。<<http://koko16.hus.osaka-u.ac.jp/~harada/sefa2002/stepwise/>>

#### <引用文献>

- 1) Baldwin, M. W., & Kay, A. C. 2003 Adult attachment and the inhibition of rejection. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **22**, 275-293.
- 2) Baldwin, M. W., Fehr, B., Keedian, E., Seidel, M., & Thomson, D. W. 1993 An exploration of the relational schemata underlying attachment styles: Self-report and lexical decision approaches. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 746-754.
- 3) Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.
- 4) Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- 5) Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (revised edition, 1982) (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1991 母子関係の理論 1 愛着行動 新版 岩崎学術出版社)
- 6) Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss. Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1991 母子関係の理論 2 分離不安 新版 岩崎学術出版社)
- 7) Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. pp.46-76.
- 8) Cate, R. M., Koval, J., Lloyd, S. A., & Wilson, G. 1995 Assessment of relationship thinking in dating relationships. *Personal Relationships*, **2**, 77-95.
- 9) Collins, N. L. 1996 Working models of attachment: Implications for explanation, emotion, and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 810-832.
- 10) Collins, N. L., & Read, S. J. 1994 Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships, 5, Attachment processes in adulthood*. London: Jessica Kingsley. pp.53-90.
- 11) Eng, W., Heimberg, R. G., Hart, T. A., Schneier, F. R., Liebowitz, M. R. 2001 Attachment in individuals with social anxiety disorder: The relationship among adult attachment styles, social anxiety, and depression. *Emotion*, **1**, 365-380.

- 12) Fraley, R. C., & Shaver, P. R. 1997 Adult attachment and the suppression of unwanted thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1080-1091.
- 13) Fraley, R. C., & Shaver, P. R. 1998 Airport separations : A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.
- 14) Griffin, D., & Bartholomew, K. 1994a Models of the self and other : Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430-445.
- 15) Griffin, D., & Bartholomew, K. 1994b Metaphysics of measurement : The case of adult attachment. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*, 5, *Attachment processes in adulthood*. London : Jessica Kingsley. pp.17-52.
- 16) 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 1982「セルフ・モニタリング尺度に関する研究」『心理学研究』, 53, 54-57.
- 17) 金政祐司・大坊郁夫 2003「青年期の愛着スタイルと社会的適応性」『心理学研究』, 74, 466-473.
- 18) 金政祐司 2007「青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連」『社会心理学研究』, 22, 274-284.
- 19) 加藤司 2001「対人ストレス過程の検証」『教育心理学研究』, 49, 295-304.
- 20) 勝谷紀子 2004「改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討」『パーソナリティ研究』, 13, 11-20.
- 21) Leary, M. R. 2005 Varieties of interpersonal rejection. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & B. von Hippel (Eds.), *The social outcast : Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York : Cambridge University Press.
- 22) Leary, M. R. & Buckley, K. 2000 Social anxiety as an early warning system : A refinement and extension of the self-presentational theory of social anxiety. In S. G. Hofman & P. M. DiBartolo (Eds.), *Social phobia and social anxiety : An integration*. New York : Allyn & Bacon. pp. 321-334.
- 23) Martin, H. J. 1984 A revised measure of approval motivation and its relationship to social desirability. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 508-519.
- 24) Marteau, T. M., & Bekker, H. 1992 The development of a six-item short-form of the state scale of the Spielberger State-Trait Anxiety Inventory (STAI) . *British Journal of Clinical Psychology*, **31**, 301-306.
- 25) Mikulincer, M., & Orbach, I. 1995 Attachment styles and repressive defensiveness : The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 917-925.
- 26) Mikulincer, M., & Shaver, P. R. 2003 The attachment behavioural system in adulthood : Activation, psychodynamics, and interpersonal processes. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.35. New York : Academic Press, pp.53-152.
- 27) 中尾達馬・加藤和生 2003「成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—」『九州大学心理学研究』, 4, 57-66.
- 28) 西村洋一 2005「人は対人関係のどのような点を気にしているのか—対人不安との関連の検討—」『青山心理学研究』, 4, 27-36.
- 29) Overall, N. C., Fletcher, G. J. O., & Friesen, M. D. 2003 Mapping the intimate relationship mind : Comparisons between three models of attachment representations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1479-1493.
- 30) Pierce, T., & Lydon, J. E. 2001 Global and specific relational models in the experience of social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 613-631.
- 31) 斎藤和志・中村雅彦 1987「対人的志向性尺度作成の試み」『名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）』, 34, 97-109.
- 32) Shaver, P. R., Schachner, D. A., & Mikulincer, M. 2005 Attachment style, excessive reassurance seeking, relationship processes, and depression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 343-359.
- 33) Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- 34) 坂本真士 1997『自己注目と抑うつ社会心理学』東京大学出版会
- 35) 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2005「羞恥感における逆U字的関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ—」『心理学研究』, 76, 445-452.
- 36) Schlenker, B. R. & Leary, M. R. 1982 Social anxiety and self-presentation : A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- 37) 清水秀美・今栄国晴 1981「STATE-TRAIT INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成」『教育心理学研究』, 29, 348-353.
- 38) Snell, W. E., Jr. 2002 New directions in the psychology of intimate relations : Research and theory. < <http://cstl-cla.semo.edu/snell/books/intimate/intimate.htm> > (2003 年 9 月 13 日)
- 39) 菅原健介 1998「シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向」『性格心理学研究』, 7, 22-32.
- 40) 辻平治郎 1993『自己意識と他者意識』北大路書房
- 41) 堤雅雄 1992「想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥心」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』, 26, 87-92.
- 42) 植田智・吉森護 1991「日本版 MLAM 承認欲求尺度

- 作成の試み』『広島大学教育学部紀要（第 1 部）』, 39, 151-156.
- 43) Vertue, F. M. 2003 From adaptive emotion to dysfunction : An attachment perspective on social anxiety disorder. *Personality and Social Psychology Review*, 7, 170-191.
- 44) 山際勇一郎・堀洋道 1991「他者との心理的距離と評価懸念の関係」『教育相談研究（筑波大学）』, 29, 13-17.